

**令和2年度  
京都府公立高校前期入学試験  
共通問題 国語 解答  
第2版**

**Dr.竹中英数塾**

**2010/3/27**

## 大問一

### (2) (ウ)

第二段落三行目『彼ら／彼女らは、手足をばたつかせながら、「周囲の環境に何かがあるか」を発見するでしょう。それと同時に、「自分自身の身体がどのようなものであるか」を発見するでしょう。』、第三段落『無限定な空間において、私たちは周囲の環境という「場」と、自分自身の身体を基準とする「自己」とを、順次、理解していくのです。』

これより、生物はまわりの環境をに何かがあるかを知る事で、周囲の「環境」から自分を基準とする「自己」を順次知ると言う事が言えるので、(ウ)「生物」は、常に移り変わる周囲の環境からの働きかけを契機として頼りにできるものを見つucker中で、「世界」を捉えていくということ。」が正解になる。

### (4) I群 (ウ) II群 (カ)

I群「ながら」は活用のない付属語で助詞である。II群助詞でないのは「学校だ」の「だ」。これは活用のある付属語なので助動詞である。

### (5) (エ)

第五段落四行目『単に「特徴」を探し出すのではなく、「それに座って考える」「それに座って仕事をする」「それに座って話をする」といった「物語」を作り出しているのではないだろうか。第六段落三行目「例えば、「山道を一人で歩き続け、くたくたになり、一服したいと思っている」という「物語」の中に自分が位置づけられています。そこで、一つの「岩」を見たとしたら、その人は、何を意識するでもなく、その岩に腰をかけるでしょう。これが、「山道を歩いてくたくたになっている」という物語の中に、その「岩」が位置づけられた瞬間です。』

これより、自分の置かれた状況「物語」の中に「椅子」位置付けるという事は、その「物語」II「状況」の中で椅子の使い方を思いつく事という事がわかるので、(エ)「その時の状況に応じた、椅子の使い方を思いつく事。」が正解になる。

### (7) ① 岩と人

自己と対象をその結びつき方によって認識しているんだよ。これを、岩の例に当てはめて考えると、Aとして認識されている、

人と岩の結びつき方を述べているのは、第六段落後ろから7行目『岩と人が、「腰をかけられるもの」と「腰をかけるもの」』なので、ここを抜き出す。

(7)㊦(イ)

第二段落三行目『彼ら／彼女らは、手足をばたつかせながら、「周囲の環境に何かがあるか」を発見するでしょう。それと同時に、「自分自身の身体がどのようなものであるか」を発見するでしょう。』第三段落一行目『無限定な空間において、私たちは周囲の環境という「場」と、自分自身の身体を基準とする「自己」とを、順次、理解していくのです。』第三段落三行目『「場」には、「自分自身」が含まれ、「自己」は環境におかれて初めて認識できるようになることから、「場」と「自己」というものは、本来、切り離せるものではありません。』

これより、自己の認識は周囲との関係において、つまり相対的に可能という事が述べられており、B)という認識の仕方

には、(イ)『周囲の環境の認識と「自己」の認識を、相対的に行う』が正解となる。

(7)㊦解答例 『周囲の環境の中にあつて、自己の身体が存在する』

第三段落『無限定な空間において、私たちは、周囲の環境という「場」と、自分自身の身体を基準とする「自己」とを、順次、理解していくのです。重要なことですが、「場」には、「自分自身」が含まれ、「自己」は環境におかれて初めて認識できるようになることから、「場」と「自己」というものは、本来切り離せるものではありません。無限定な空間においては、「場」の認識(世界を知ること)と「自己」の認識(自分自身を知ること)は、同時に起こるのです。』

これより、認識を行うものの条件として、一. 周囲の環境と、二. そこに置かれた自分の身体がある、という条件である事がわかるので、解答例のような文章になる。

## 大問二

### (1) (ウ)

(ア) は第一段落七行目『それは自然美なのか、芸術美なのか、あるいは技術美なのか。私はこの場合も意識の態度によって、その美の種類が決定されてくのではないかと思う。』

(イ) は第一段落十行目『そこに何か詩情を求めて詩の材料を探しながら鑑賞しているとすれば、やがて詩になるかならないかは別として、芸術に関わりのある見方になっていると言わなければなるまい』

(エ) は一段落全体

以上の個所に書かれているが、(ウ) は書かれていない。

### (3) (イ)

第一段落十七行目『事物の側によって決定されるのではなく、意識の構造如何によって区別づけられてくると言わなければならない』  
第二段落二行目『美の位相がいくつかあって』

より、美の種類は事物で決定されるのではなく意識によって決定され、それを位相と読んでいると考えて、(イ) 『事物の局面においては存在せず、意識の位相に他ならない』が正解になる。

(4) 1群(ア) なぜならば 2群(ク) 後に述べられていることが、前に述べられていることの説明や補足であることを表す働き。

Bの前後を読むと、『これを明らかにするために、我々の日常生活の意識構造を調べてみたい。』『美を意識するということは、それが大きければ大きいほど、日常的な意識構造の中断であり、・・・』より、後に述べられていることが、前に述べたことの原因付けであると読み取れる。

### (5) (エ)

直喩法を選ぶ。

### (7) (ウ)

第四段落一行目の『立ち止まる』は、第三段落九行目『行動体系の意識方位を水平的な運動とすれば、それを断ち切る輝きへの意識の方位は、いわば垂直的な切断である』を言い換えている。そして、第五段落一行目『われわれの行動目的とは無関係に、むしろその行動目的への傾動

を断ち切るような姿で統一的に意識されたときに、われわれはその輝きに意識を定着させる。それが私は自然美の成立する意識構造であると思ふ。』

よつて、4段落が3段落の内容を異なる表現に言い換えて、5段落の結論へつなげているので、(ウ)が正解。

(8) ① (ウ)

第二段落で日常的な行動の例えとして家から勤め先へ向かう行動があげられており、第3段落で自然美に気づく例として、立木に蔭がからまり、それに陽の光が照り映えている光景に目を止めて立ち止まるという事が書かれている。これより、(ウ) 水平方向に歩く事Ⅱ日常の通勤、空を見上げる事Ⅱそれを断ち切る垂直方向の動作、と考える。

(8) ① Y 解答例 「一定の主観的に組織立てよう」と

第二段落後ろ三行 『日常の意識は、客観的にみる限りは連関に対して中立的な、断片的現象を、一定の主観的目的に応じて一つの連関に組織立てる事である。』  
をまとめる。

(8) ① Z 解答例 「行動目的から離れて統一的に意識」

第五段落一行目 『われわれの行動目的とは無関係に、むしろその行動目的への傾動を断ち切るような姿で統一的に意識されたときに、』  
をまとめる。

## 大問三

### (3) (エ)

本文六行目『思ひ分くかたなく、不慮の言を出だし、後悔千廻云々』

より、成通が言った事を後悔しているのが分かるので (エ) 「師頼の考えを知らない成通が口走った、軽はずみな発言。」が正解。

### (4) (ア)

本文八行目『孔子、大廟に入りて、まつりごとにしたがふ時、毎時、かの令長に問はずと言つことなし。人これを見て、「孔子、礼を知らず」と難じければ、』に対して『問ふは礼なり』とぞ答へける。

「問ふは例なり」は、孔子を難じた人に対する返答なので、(ア) 孔子が正解。

### (5) ① A 尋ねた

「あらあら人に問ひけり』

孔子が令長に何でも聞いた事より、「尋ねた」

### (5) ① B 手本

論語に書かれている孔子の行動を見習ったので、「手本」

### (5) ① (イ)

本文後ろから二行目『「これ、慎しみの至れるなり」といへり』

より、慎しみ深い、つまり思慮深いことが分かるので (イ) 思慮深く謙虚であることにおいて比類のない人物が正解。